

英語とスペイン語における不定法 Wh 島について

石 岡 精 三*

Infinitival *Wh*-Islands in English and Spanish

Seizo ISHIOKA*

Key words : EPP, PIC, *Wh*-Island Constraint

0. はじめに⁰⁾

Chomsky (2001) が提唱するフェイズ不可侵性条件 (Phase Impenetrability Condition, PIC) は, *Wh* 島制約に抵触する (1) から (4) の英語の用例すべてを不適格と予測する。本稿の第 1 節において述べるように, PIC は *Wh* 要素が *Wh* 島内部から移動する派生を生成不能とする効果をもつ。しかしながら, PIC が排除する (2a) と (3a) と (3c-d) を基本的に適格と判断する話者グループが存在する。このグループでは, 不定法 *Wh* 島内部からの項 (Argument) である *Wh* 要素の移動が許容されている (4a-c, 4d)。

- (1) a.*Who_j do you wonder what_i t_j borrowed t_i?
b.*What_i do you wonder who borrowed t_i?
- (2) a.(?) [Which books]_i did John wonder [which students]_j had borrowed t_i? (Freidin 1995 : (22))
b.* [Which students]_j did John wonder [which books]_i t_j had borrowed t_i? (Freidin 1995 : (25))
c.* [Which students]_j did John wonder t_j had borrowed [which books]? (Freidin p.c. (2004.12.5))
d.* [Which books]_i did she say who read t_i? (Freidin 1992 : p.94, (36b))
e.*Who_j did John wonder t_j had borrowed what? (Freidin p.c. (2004.12.5))
- (3) a.(?) [Which book]_i do you wonder who was going to buy t_i? (Barss 2000 : (19))
b.*?What_i did you wonder who was going to buy t_i? (Barss 2000 : (18))
c. [What products]_i do they wonder [which age-groups]_j will buy t_i? (É. Kiss 1993 : p.93, (21))
d. [Which students]_i do you know who invited t_i? (É. Kiss 1993 : p.89)
- (4) a.?(?) [Which car]_i did John tell you how_j to fix t_i t_j? (Chomsky 1986 : p.37, ((79a))
b.?(?) [Which car]_i did he wonder **whether** to fix t_i? (Chomsky 1986 : p.37, (79b))

原稿受付：平成19年5月25日

*長岡技術科学大学語学センター

- c. What_i do you wonder how_j to explain t_i t_j? (Oba 2000 : (4a))
 d.*How_j do you wonder what_i to fix t_i t_j? (Oba 2000 : (4b))

同様に、PIC は Wh 島制約に抵触する (5) と (6) のスペイン語の用例すべてを不適格と予測する。しかしながら、(5a) と (6a) のスペイン語の用例は、ある一定の条件下で Wh 要素が Wh 島内部から移動可能であることを示している。適格と判断される (5a) においては、主語 Wh 要素 (*quién* 'who') が直接目的語 (DO) Wh 要素 (*qué película* 'what movie') の移動によって形成される Wh 島内部から移動している。同じく適格と判断されるスペイン語の用例 (6a) でも、間接目的語 (IO) Wh 要素 (*a quién* 'to whom') が DO Wh 要素 (*qué* 'what') によって構成される Wh 島内部から移動している。

- (5) a.¿Quién no sabes [qué película]_j dirigió t_i t_j en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (68))
 'Who don't you know what movie directed in '51?'
 b.*¿[Qué película]_j no recuerdas quién dirigió t_i t_j en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (69))
 'What movie don't you remember who directed in '51?'
 (6) a.¿[A quién]_i dices que no te acuerdas qué_j le_i has dicho t_i t_j? (Torrego 1984 : (54a))
 'To whom do you say that you don't remember what you have said (to him)?'
 b.*¿Qué_j dices que no te acuerdas [a quién]_i le_i has dicho t_i t_j? (Torrego 1984 : (54b))
 'What do you say that you don't remember to whom you have said (to him)?'

上で見たように、Wh 島制約をフェイズ不可侵性条件 (PIC) のみに還元することには問題があると思われる。本稿では、後に提示される (5) と (6) のスペイン語の用例を説明する論法が基本的に英語の不定法 Wh 島の用例 (4) だけでなく、[+Finite] Wh 島の用例である (1) から (3) にも適用可能であることを示す。¹⁾

本稿の構成は、以下の通りである。第 1 節において、Chomsky (2000, 2001) による PIC の問題点を指摘する。具体的には、Akahane (2006) に基づいて考える。第 2 節では、スペイン語の [+Finite] CP Wh 島内部からの Wh 要素移動を説明する論法を提示する。英語における対応事象にも検討を加える。第 3 節では先ず、スペイン語の不定法 Wh 島内部からの移動事象を考察する。次に、英語の不定法 Wh 島内部から Wh 要素移動を取り扱う Obata (2006a) に検討を加える。スペイン語の不定法 Wh 島内部からの移動を説明する論法が対応する英語の用例を説明可能であることを示す。第 4 節は結びを構成し、本稿の仮説群にとって問題を惹き起こすと思われる用例に検討を加え、これに対するひとつの打開策を提示する。

1. PICの概要と問題点

Chomsky (2000) によれば、派生は C あるいは v を含む語彙配列によって決定されるフェイズを単位として進行する。つまり、フェイズは派生における基本単位として機能し、フェイズ毎に演算処理が適用される。フェイズが下線で表記された (7) において、フェイズが HP から直接上位の ZP に移行すると、演算の適用が完了したとみなされる下位のフェイズ (HP) は、その一定部分を除いて演算の適用に関して見えなくなり、演算の負担が軽減されることになる。(8) にあるように、演算の適用に関して依然として見える部分として、主要部 (H) と先端部 (Edge) が想定されている。本稿では、先端部として Spec (H) と HP に付加した位置を仮定する (Chomsky 2001 : p.13)。

(7) [ZP ... Z [HP ... H YP]]

(8) Phase Impenetrability Condition (PIC-1) (Chomsky 2000 : p.108)

In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations.

つまり、ZP フェイズにおいて適切に演算処理を受けるためには、YP 内の最大投射は H の先端部 (Edge) へ移動していなくてはならないのである。(1) の用例に対応する (9) で考えてみよう。本稿においては、Simpson and Wu (2002) と Obata (2006a) と同様、CP のみがフェイズを構成すると想定する。

(9) a. [CP whoi [C1 [ti borrowed what]]]

b. [CP whoi [C2 you wonder [CP ti' [C1 [ti borrowed what]]]]]

c. [CP [C2 [you wonder [CP whoi [CP whatj [C1 [ti borrowed tj]]]]]]]

疑問節の C は、解釈不可能な素性 [*Q*] と解釈可能な素性 [wh] を付与される。一方、Wh 要素は、解釈可能な素性 [Q] と解釈不可能な素性 [*wh*] を含む。最小連結条件 (Minimal Link Condition) により、(9a) における embedded C (embd.C) の素性 [*Q*] は、主語 Wh 要素 (who) との照合により削除される (同時に Wh の素性 [*wh*] もまた、C に付与された素性 [wh] との照合により削除される)。次いで、matrix C の素性 [*Q*] が照合・削除される必要がある。この素性 [*Q*] は、embd.C の先端部に移動した主語 Wh 要素 (who) との照合により削除される (9b)。しかしながら、この派生は破綻する。これは、matrix V (wonder) の選択素性が満たされないためである。matrix V (wonder) は、その Spec 位置に顕在的な Wh 要素が生起する CP を要求するからである。ここで、

解釈可能な素性は、解釈不可能な素性と連係して初めて照合する能力を付与されると考えてみよう。例えば素性 [Q] は、同時に素性 [*wh*] をもつ場合に関り、素性 [*Q*] を照合できることになる。この前提の下では、embd.C の先端部に移動した Wh 要素 (*who*) は素性 [*wh*] を削除されている。よって、embd.C の先端部に位置する Wh 要素 (*who*) は、matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除することはない。それでは、その Spec 位置に主語 Wh 要素 (*who*) が生起する embd.CP に DO Wh 要素 (*what*) が付加した派生である (9c) は収束するであろうか。先端部に移動した DO Wh 要素 (*what*) は matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除できるのではないのであろうか。

派生に関する経済性が局所的に、例えば CP フェイズ毎に評価されると考えてみよう。DO Wh 要素 (*what*) が embd.CP に付加移動する誘因を embd.CP 内に見いだすことはできない。この付加移動の引き金となる素性等が embd.CP 内に存在しないからである。この付加移動は、単に matrix CP フェイズの収束を確保するためであると考えられる。結果として、この付加移動自体が経済性の原理から排除されることになる。つまり、(1) に対して収束する派生を想定することはできない。同様に、(2) から (4) の英語の用例もすべて崩壊する。(5) と (6) のスペイン語の用例も、すべて不適格と予測されることとなる。²⁾

ここで、Akahane (2006) について考える。Akahane (2006) は、(9c) における DO Wh 要素 (*what*) が embd.CP に付加移動する誘因を embd.CP 内に想定する。具体的には、以下のように考える。EPP 素性が embd.[+wh] C に付与され、この EPP 素性は項 (Argument) である DP がもつ素性 [D] によって照合の適用を受ける。Akahane (2006) と同様に、V に下位範疇化される PP もまた EPP を照合可能と考える (素性浸透 (Feature Percolation) によって、P はその Sister 要素である DP から D 素性を受け継ぐと考える)。C の素性 ([*Q*][wh]) を照合する Wh 要素は当該照合が完了した時点でその移動を停止し、それ以上他の素性と照合関係を形成することはない (C の素性 ([*Q*][wh]) はペアとして機能し、同時に単一の Wh 要素のもつペア素性 ([Q][*wh*]) と照合関係を形成すると想定される)。以下の (10a, b) の用例で考えてみよう。³⁾

- (10) a.*How_j did they ask you who_i ti behaves t_j? (Akahane 2006 : (9))
 b.??[which problem]_i do you wonder how_j John could solve ti t_j? (Akahane 2006 : (62))

(10a) において、付加語 Wh 要素 (*how*) は embd.C の EPP 素性と照合関係を形成することはない。項である主語 Wh 要素 (*who*) が EPP 素性と embd.C の素性

([*Q*][wh]) の双方を照合する派生では、当該 Wh 要素は embd.C の先端部でその移動を停止し、それ以上照合操作に参加することはない。一方で、付加語 Wh 要素 (*how*) はその生成位置にとどまる。PIC により、matrix C の素性 [*Q*] が照合・削除されることはない (当該派生は崩壊する)。主語 Wh 要素が EPP 素性のみを照合する派生では、付加語 Wh 要素が embd.C の素性 ([*Q*][wh]) と照合関係を形成する。当該付加語 Wh 要素は embd.C の先端部でその移動を停止し、更なる照合に関与することはない。この場合の派生でも、matrix C の素性 [*Q*] が照合・削除されることはない (当該派生は崩壊する)。(10b) では、付加語 Wh 要素 (*how*) が embd.C の素性 ([*Q*][wh]) と照合関係を形成し、その先端部へ移動する。DO Wh 要素 (*which problem*) は embd.C の EPP 素性を照合し、embd.C の先端部へ移動する。当該 Wh 要素の素性 ([Q][*wh]) は照合に参加していないため、その照合能力を保持している。よって、この DO Wh 要素は、matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除する (Wh の素性 [*wh*] も照合削除される)。つまり、(10b) の派生が収束することになる。それでは、(10b) に対する周延的な判断は、どのように説明されるのか。これは、(11) の最大化原理 (Maximization Principle) によって説明される。これにより、素性間の適合関係 (Matching)、つまり素性の同一性 (Identity) による照合関係において、解釈不可能な素性は一度に完全な形で削除される必要がある。部分的な素性削除は許容されないことになる。収束する (10b) の派生においては、EPP 素性と素性 ([*Q*][wh]) のそれぞれが異なる Wh 要素と照合関係にある。つまり、(10b) の派生はこの最大化原理に抵触する。

- (11) Maximization Principle :
Maximize matching effects. (Chomsky 2001 : p.15)

既に述べたように、(10b) の派生における embd.C の EPP 素性は DO Wh 要素 (*which book*) との照合関係により削除され、[*Q*] は付加語 Wh 要素 (*how*) との照合関係により削除される。つまり、embd.C の素性削除は部分的に進行することになる ((11) の最大化原理に抵触する)。この論法は、本稿の (2a) と (4a) のような英語の用例、さらに (5a) のようなスペイン語の用例を周延的と予測することになる。

2. [+Finite] Wh 島について

(5) と (6) のスペイン語の用例で観察したように、項である Wh 要素は、あ

る一定の条件下で Wh 島内部から移動可能である。(12) の用例が示すように、付加語の Wh 要素が Wh 島内部から移動することはない。例えば (12a) において、付加語 Wh 要素 (*cuándo* 'when') が Wh 島外部へ移動することはない。それに対して、主語 Wh 要素 (*quién* 'who') は Wh 島内部から移動可能である。(12) の検討に先立ち、本稿の (5) について考える (便宜上、当該用例を再掲する)。

- (12) a.*¿Cuándo_i (no) recuerdas quién_j llegó t_j a este país? (Suñer 1992 : (47a))
 'When do/don't you remember who arrived in this country?'
 b.¿Quién_i (no) recuerdas cuándo_i llegó t_j a este país? (Suñer 1992 : (40a))
 'Who do/don't you remember when s/he arrives in this country?'
 c.*¿Dónde_i (no) recuerdas [qué libro]_j compraste t_j ti? (Contreras 1994 : (29))
 'Where do/don't you remember which book you bought?'
 d.*¿[Qué libro]_j (no) recuerdas dónde_i compraste t_j ti? (Contreras 1994 : (30))
 'Which book did/didn't you remember where you bought?'
 e.¿[Qué libro]_j (no) recuerdas dónde_i lo_j compraste t_j ti? (Contreras 1994 : (31))
 'Which book did/didn't you remember where you bought (it)?'
- (5) a.¿Quién_i no sabes [qué película]_j dirigió t_j en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (68))
 'Who do you know what movie directed in '51?'
 b.*¿[Qué película]_j no recuerdas quién_i dirigió t_j en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (69))
 'What movie don't you remember who directed in '51?'

(5a) において、主語 Wh 要素 (*quién* 'who') は DO Wh 要素 (*qué película* 'what movie') の移動によって形成される Wh 島内部から移動可能である。DO Wh 要素 (*qué película* 'what movie') が主語 Wh 要素 (*quién* 'who') によって形成される Wh 島内部から移動する派生は排除される。この相違は、どのように説明されるのであろうか。

スペイン語の用例 (5) の embd.CP として (13) の構造を想定してみよう。

- (13) [CP quién_i [CP [qué película]_j [TP dirigió t_j en el cincuenta y uno]]] (←(5a))

この構造は、以下のように生成される。主語 Wh 要素の始発点として、その生成位置 (Spec(v)) を想定する。DO Wh 要素の生成位置がその始発点を構成すると考える。Richards (1999) と同様に、2つの要素が移動する派生は、始発点がより上位の要素が外部の Spec へ移動した後もう一方の要素が内部の Spec へ移動するたくし込み (Tucking-In) 様式に従うと考える (外部の Spec と内部の Spec は、それぞれ本稿の CP に付加した位置と Spec(C) に対応する)。

ここで、C の先端部にある要素の中でより上位にある Wh 要素が **matrix C** の素性 [***Q***] を照合・削除できると考えてみよう。DO Wh 要素 (*qué película* 'what

movie') が embd.C の素性 [*Q*] を照合・削除する。主語 Wh 要素 (*quién* 'who') が embd.C の EPP 素性と照合関係を形成する (当該 EPP 素性が削除される)。この主語 Wh 要素はその素性 ([Q][*wh]) を保持しているため, matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除できる。これにより, (5a) の適格性が導出される。DO Wh 要素 (*qué película* 'what movie') がその素性 ([Q][*wh]) を保持することも可能であるが, 当該 DO Wh 要素は主語 Wh 要素よりも下位にあるため, matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除することはない (この場合の派生は崩壊する)。言うまでもなく, 一方の Wh 要素が embd.C の素性 [*Q*] と EPP 素性の双方を照合する派生は PIC によって排除される。これは, embd.C の素性 [*Q*] と EPP 素性の双方を照合すべく embd.C の先端部に移動した Wh 要素がその照合能力を失い当該位置でその移動を停止するためである。

この論法は, 何らかのプロセスによって DO Wh 要素の始発点の主語 Wh 要素の始発点よりも上位に指定される派生を適格と予測することになる。この予測は, 以下の用例 (14a) によって例証される。(14a) の用例が示すように, 対応する再述接語 (例えば *lo*) を随伴する DO Wh 要素は主語 Wh 要素によって形成される Wh 島内部から移動可能である。このタイプの Wh 要素は D-Linked Wh 要素として機能し, その始発点として T と v の間に生起するゼロ範疇 Agr-DO の Spec 位置 (Spec(Agr-DO)) が指定されると考えられる ((14b) の構造を参照)。DO Wh 要素 (*qué libro* 'which book') の始発点である Spec(Agr-DO) が主語 Wh 要素の始発点 (Spec(v)) よりも上位であるため, DO Wh 要素が matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除することになる。^{4), 5)}

(14) a. ζ [Qué libro]_i no sabes quién_j lo_i compró t_j ti? (Contreras 1992: (11b))

'What book don't you know who bought (it) ?'

b. [CP [qué libro]_i [CP quién_j [TP lo_i compró [Agr-DOP [t_j ti]]]]]

DO Wh 要素と IO Wh [*a*+DP] 要素が共起する (15) のような用例では, 通例対応する再述接語 (*le, les*) を随伴する IO Wh 要素が matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除する。これは, Spec(Agr-DO) の直接上位, あるいは直接下位の位置に生成される Spec(Agr-IO) が IO Wh 要素の始発点を構成するためである (DO Wh 要素の始発点としてその生成位置が指定される)。つまり, IO Wh 要素が embd.C の EPP 素性, 次いで matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除し, (15b) と (16a) が適格と予測されることになる ((15a) は生成不能となる)。IO Wh 要素の始発点は主語 Wh 要素の始発点 (Spec(v)) よりも上位であるため, IO Wh 要素が Wh 島内部から移動するタイプである (15c) が適格と予測される。さらに,

対応する DO 再述接語を随伴する Wh 要素の始発点は Spec(Agr-DO) と指定される。Spec(Agr-DO) は Spec(Agr-IO) の直接上位に生成可能であるため、D-Linked DO Wh 要素が Wh 島内部から移動する (16b) のタイプも適格と予測されることになる。^{6), 7)}

- (15) a.*¿Qué dices que no te explicas [a quién]_j le_i ha comprado Juan ti t_j? (Torrego 1984 : (46b))
 ‘What do you say that you don’t understand for whom John has bought (for him)?’
 b.¿[A quién]_i dices que no te acuerdas qué le_i has dicho t_j ti? (Torrego 1984 : (40c))
 ‘To whom do you say that you don’t remember what you have said (to him)?’
 c.¿[A cuáles de ellos]_i sabes quién no le_i dio t_j una buena recomendación ti? (Suñer 1992 : (40c))
 ‘Which of them do you know who didn’t give (them) a good recommendation?’
- (16) a.¿[A quién]_i no sabías [qué diccionario]_j le_i había devuelto Celia ti t_j? (Suñer 1991 : (6))
 ‘To whom didn’t you know what dictionary Celia had returned (to him)?’
 b.¿[Qué libro]_i no sabías [a quién]_j se le_i había regalado Bri ti t_j el sábado? (Suñer 1991 : (10c))
 ‘Which book didn’t you know to whom Bri had given (it to him) on Saturday?’

ここで、(12) のような付加語 Wh 要素が共起する用例について考える。既に述べたように、付加語 Wh 要素が matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除する派生は排除される。付加語 Wh 要素が matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除するためには、換言すれば付加語 Wh 要素が長距離移動するためには、当該付加語が embd.C の先端部のより上位の位置に生起するだけでなく、それ自身の素性 ([Q] [*wh*]) を保持していなければならない。つまり、もう一方の Wh 要素が embd.C の素性 [*C*] を照合・削除する必要がある。このためには、付加語 Wh 要素が embd.C の EPP 素性と照合関係を形成しなければならない。付加語 Wh 要素は EPP 素性と照合関係を形成できないため、この種の派生は崩壊することになる。仮に、(12) の付加語 Wh 要素が vP に右方付加した位置（あるいは、v と Agr-DO(Agr-IO) の間）に生成されると考えてみよう。これにより、(12c-d) の非文性と (12e) の適格性が説明可能となる。これは、付加語 Wh 要素 (*dónde* ‘where’) の生成位置 (始発点) が DO Wh 要素 (*qué libro* ‘which book’) の生成位置 (始発点) よりも上位と認定されるためである (12c-d)。(12e) では、DO Wh 要素の始発点として Spec(Agr-DO) が指定される。この位置は付加語 Wh 要素の生成位置よりも上位にあるので、この DO Wh 要素が matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除可能である。これにより、(12e) は適格と予測されることになる。

次に、(12a) と (12b) のような主語 Wh 要素と付加語 Wh 要素が共起する用例について考える。(12) に生起する非対格動詞 (Unaccusative Verbs) を含めすべての能動動詞に対する主語要素の始発点としてその生成位置が指定されると考

えてみよう。本稿では, Spec(C), あるいは C の位置に生成される Wh 要素を除く付加語 Wh 要素が vP に右方付加した位置 (あるいは, v と Agr-DO (Agr-IO) の間) に生成されると想定する。Wh 要素の始発点の位置関係が C 統御で決定されるにせよ, M 統御で決定されるにせよ, vP に左方付加した位置が Spec(v) よりも上位と同定される。これが妥当であれば, (12a) と (12b) は共に不適格と予測されることになる。この予測に反して, 主語 Wh 要素が長距離移動する (12b) は適格と判断される。この問題は, その生成位置 (Spec(v), あるいは v の Sister 位置) だけでなく, Spec(T) もまた主語 Wh 要素の始発点として指定されると想定することによって打開されると思われる。これにより, embd.C の尖端部の上位に移動した主語 Wh 要素が matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除可能となり, (12b) は適格と予測されることになる。⁸⁾

次に, 基本的に適格と判断される (3a) などの英語の用例に検討を加える (便宜上, (1) から (3) を以下に再掲する)。

- (1) a.*Who_j did you wonder what_i t_j had borrowed t_i?
b.*What_i did you wonder who had borrowed t_i?
- (2) a.(?) [Which book]_i did John wonder [which students]_j had borrowed t_i? (Freidin 1995 : (22))
b.*[Which students]_j did John wonder [which books]_i t_j had borrowed t_i? (Freidin 1995 : (25))
c.*[Which students]_j did John wonder t_j had borrowed [which books]? (Freidin p.c. (2004.12.5)) ←
d.*[Which books]_i did she say who read t_i? (Freidin 1992: p.94, (36b))
e.*Who_j did John wonder had borrowed what? (Freidin p.c. (2004.12.5)) ←
- (3) a.(?) [Which book]_i do you wonder who was going to buy t_i? (Barss 2000 : (19))
b.??*What_i did you wonder who was going to buy t_i? (Barss 2000 : (18))
c.[What products]_i do they wonder [which age-groups]_j will buy t_i? (É. Kiss 1993 : p.93, (21))
d.[Which students]_i do you know who invited t_i? (É. Kiss 1993 : p.89)
- (17) a.(?) [Which city]_i did you ask [which king] invaded t_i? (Adger 2003 : p.390, (65))
b.(?) [Which king]_j did you wonder t_j invaded [which city]? (Adger 2003 : p.390, (68)) ←
c.*[Which king]_j did you ask [which city]_i t_j invaded t_i? (Adger 2003 : p.390, (66))
d.(?) Who_j did you ask t_j saw what? (Adger 2003 : p.390, (67)) ←
e.*What_i did you ask who saw t_i? (Adger 2003 : p.389, (58))

(5) と (6) などのスペイン語の用例の適格性を説明する論法は, Barss (2000) が挙げる用例 (3a) を適格と予測する。これは, 上のスペイン語の用例 (14a) に並行するものである (長距離移動する DO Wh 要素 (which book) が D-Linked Wh 要素であるため, その始発点として Spec(v) より上位の Spec(Agr-DO) が指定可能となる)。 (3b) の用例は不適格と予測される。これは, 始発点がより下位

に指定される Non-D-Linked Wh 要素 (*what*) が主語 Wh 要素によって構成される Wh 島を越えるからである ((2a) と (2d) の対比が示すように、Freidin (1992, 1995) が挙げる用例では、主語 Wh 要素と DO Wh 要素の双方が D-Linked Wh 要素である派生 (2a) のみが許容される)。同じ論法により、(1b) は不適格と予測される。適格と予測されるのは (1a) である。これは、長距離移動する主語 Wh 要素 (*who*) が DO Wh 要素 (*what*) よりも上位に生成されるからである (主語 Wh 要素の始発点が DO Wh 要素の始発点よりも上位にある)。(1a) は、予測に反して不適格と判断される。この問題を解消する論法を提示するために、Adger (2003) が指摘する話者グループにおける判断に検討を加える。特に、(17b) と (17d) の適格性に対して、(17c) が不適切と判断される点が非常に興味深い。

素性 [**Q**] を付与された *embd.C* の先端部にあるより下位の Wh 要素がその移動先で発音されるスペイン語とは異なり、対応する英語においては、より下位に位置する Wh 要素がその元位置 (*In-Situ Position*) で発音されると考えてみよう (主語 Wh 要素の元位置として *Spec(T)* が指定される一方で、他の Wh 要素の元位置としてその生成位置が想定される)。これが妥当であれば、移動先と元位置によって形成される連鎖が *matrix V* の選択素性を満たすと考え必要がある。疑問文 CP をその *Sister* 位置に生起することを要求する *matrix V* の選択素性は、その *Spec* 位置に生起する顕在的な Wh 要素の生起だけでなく、移動先と元位置によって形成される連鎖によっても満たされ则认为る必要がある。これにより、(17) の英語の用例が説明可能となる。(17a) では、DO Wh 要素である D-Linked Wh 要素 (*which city*) の始発点として *Spec(Agr-DO)* が指定される (主語 Wh 要素 (*which king*) の始発点は *Spec(v)* であり、元位置 (*Spec(T)*) で発音される)。これに対して、DO Wh 要素が D-Linked Wh 要素でない (17e) は生成不能となる (適切な派生として、(17d) が生成される)。(17c) では、主語 Wh 要素 (*which king*) の始発点が DO Wh 要素 (*which city*) の始発点よりも上位に指定される (それぞれの始発点として、その生成位置が指定され则认为る。*Spec(T)* が主語 Wh 要素の始発点を構成するか否かについては後述する)。始発点がより下位に指定される DO Wh 要素 (*which city*) の発音位置が不適切であるため、(17c) は不適格と予測される ((17b) が適切な出力となる)。(17b) と (17d) は全く並行する派生形式に従っている。つまり、(17d) の適格性を説明する本稿の論法は、(1b) を非文と予測することになる (当該派生が生成不能となる)。

ここで、Freidin (p.c.) が (2c) を非文と判断している点に注目する必要がある。既に述べたように、Adger (2003) は同じタイプの用例である (17b) を適格と

判断する ((2e) と (17d) の相違も同様である)。Freidin が属する話者グループでは, [+wh] CP に関する matrix V の選択素性を満たすための更なる条件, 恐らく PF における条件が課されると思われる。具体的には, ある特定の話者グループにおいて, matrix V によって選択される [+wh] CP の主要部 C と embd.CP 内部の元位置で発音される Wh 要素との間に課される隣接条件 (Adjacency Condition) を想定する。matrix V (*wonder*) は [+wh] CP を選択する。embd. [+wh] CP の主要部と Wh 要素 (*which books, what*) は隣接しない。これにより, (2c) と (2e) の非文性が説明されることになる。Adger が属するグループでは, この隣接条件が関与しないと考えられるため, (17b) と (17e) は適格と予測される。Barss (2000) と É. Kiss (1993) が挙げる用例 (3a) と (3c-d) とは異なり, Freidin (1992, 1995) の用例 (2) では, 主語 Wh 要素と DO Wh 要素の双方が D-Linked Wh 要素である場合に限り, DO Wh 要素の始発点として Spec(Agr-DO) が指定される。

Chomsky (1980) は, 本稿の (1) に類似する用例 (18) に関して興味深い指摘をする。本稿の仮説群は, (18a) と (18b) の双方を不適格と予測する (Chomsky (1980) では, 隣接条件が適用される)。しかしながら, Chomsky (1980 : p.37) によれば, ほとんどの話者が (18b) を (18a) よりもかなり認容度が高いと判断する。

- (18) a. ?*Who_i did you wonder what_j ti saw t_j? (Chomsky 1980 : (105))
 b. ??(?) What_j did you wonder who_i (ti) saw t_j? (Chomsky 1980 : (106))
- (19) a. ??What_i did you wonder [how (well)]_j he did ti t_j? (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (i))
 b. ??[Which book]_i do you wonder [how (well)] the students read ti? (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (ii))
 c. ?*[Which students]_i do you wonder [how (well)] read ti? (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (iii))
 d. *How_i do you wonder who fixed the car ti? (Chomsky 1986 : p.49, (107))

Freidin and Lasnik (1981 : fn.14) では, 主語 Wh 要素が embd.Spec(C) 位置へ移動しないことと (18b) の認容度向上とが関連づけられる (Chomsky (1986) の空移動仮説 (Vacuous Movement Hypothesis))。これにより, 下接の条件 (Subadjacency Condition) が満たされると考えている。(18b) が完全に文法的と判断されないのは, matrix V (*wonder*) の選択素性が embd.Spec(C) 位置における Wh 要素の生起から matrix V と Wh 要素の隣接へと緩んでいるためだとされる。Freidin and Lasnik (1981) は, 主語 Wh 要素と類似の振る舞いを示すものとして, 付加語 Wh 要素 (*how(well)*) の用例 (19a) を挙げている。Freidin and Lasnik (1981) の

説明法は、当該付加語が何らかの要因によって、*embd.Spec (C)* と *embd.Spec (T)* の間の位置を経由して *embd.Spec (C)* へ移動すると前提した場合に成立する（この移動を「付加語 Wh シフト」と呼ぶことにする）。当該付加語 Wh 要素の元位置として、この「付加語 Wh シフト」の着地点が指定されると考えることにする。これにより、本稿で提唱される隣接条件の要請が満たされる。換言すれば、本稿の隣接条件が「付加語 Wh シフト」の引き金である考えられる。Freidin and Lasnik (1981) 自身が指摘しているように、認容度が向上する (18b) と (19a) を説明する彼等の論法は、(19b) と (19c) の双方に対しても認容度の向上を予測する。しかしながら、彼等自身が指摘しているように、(19c) の認容度は (19b) ほど高くない。つまり、(19c) の認容度は向上しない (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14)。

本稿の論法では、(17) の判断が下される話者グループにおいても、(18a) は生成不能と予測される (Wh 要素 (*what*) の発音位置が不適切である)。(18b) の認容度の向上は、DO Wh 要素 (*what*) (と主語 Wh 要素 (*who*)) が D-Linked Wh と解釈された派生として説明される。つまり、(18b) は本稿の (2a) と (3a) と並行する取り扱いを受けることになる。(18b) が完全に適格と判断されないのは、単純 Wh 要素に対する D-Linked Wh 要素として解釈が周辺的であることに還元される。このことは、(19a) における認容度の向上に対しても当てはまる（この前提となる「付加語 Wh シフト」が周辺的に適用され则认为られる）。この場合もまた、DO Wh 要素 (*what*) が D-Linked Wh 要素と解釈され、その始発点として *Spec (Agr-DO)* が指定される。付加語 Wh 要素 (*how (well)*) の始発点（生成位置）として、vP に付加した位置を想定してみよう。つまり、D-Linked DO Wh (*which book*) そのものが関与する (19b) よりも認容度が低下するが、DO Wh 要素 (*what*) の長距離移動は周辺的に許容されることになる。D-Linked DO Wh 要素 (*which book*) が生起する (19b) の周辺性は、「付加語 Wh シフト」の周辺性に起因する。既に述べたように、(19c) の認容度は向上しない。これは、少なくともある英語の話者グループにおいて、*Spec (T)* が主語 Wh 要素の始発点として機能しないと想定することにより説明されるであろう。つまり、(19c) において、主語 Wh 要素 (*which students*) の始発点として *Spec (v)* が指定される。付加語 Wh 要素 (*how (well)*) の始発点が主語 Wh 要素のそれよりも上位となるので、(19c) は生成不能と予測される。同様のことは、Boyd (1992) が挙げる用例 (20) においても観察される。特に、(20b) に対する判断が興味深い。⁹⁾

- (20) a.*How_i did you wonder what_j Joe caught t_j t_i? (Boyd 1992 : p.8, (6))
 b.?(?) What_j did you wonder how_i Joe caught t_j t_i? (Boyd 1992 : p.9, (7))
 c.?[Which fish]_j did you wonder how_i Joe caught t_j t_i? (Boyd 1992 : p.9, (8))

既に確認したように、本稿の (10b) の非文性を最大化原理に還元することには問題がある。当該用例の周辺性は、上で想定した「付加語 Wh シフト」の周辺性から導出されると考えられる。次に、*whether* で導入される [+Finite] CP 内部からの Wh 要素移動について考える。仮に、*whether* が C の実現形態であると考えてみよう。註 (4) で述べたスペイン語の対応表現 *si* (*whether*) によって形成される島内部からの移動を説明する論法は、項要素が *whether* 島内部から移動する派生を適格と予測することになる。これは、*whether* が embd.C の素性 [*Q*] を照合・削除し、embd.CP の尖端部に移動して当該 C の EPP 素性と照合関係を形成する Wh 要素が matrix C の素性 [*Q*] を照合・削除するためである。よって、(21a) のような付加語 Wh 要素が長距離移動する派生は排除されることになる。項である目的語 Wh 要素、あるいは主語 Wh 要素は、長距離移動可能と予測される。しかしながら、目的語 Wh 要素が *whether* 島内部から移動する派生 (21b) は周道的と判断される。主語 Wh 要素が長距離移動する派生 (21c) は、付加語 Wh 要素が長距離移動する (21a) と同様、非文と判断される。

- (21) a.*How_i do you wonder **whether** we can help Bill t_i? (Rizzi 1990 : p.81, (18a))
 b.?(?) [Which book]_i do you wonder **whether** John read t_i? (Oka 1993 : (65a))
 c.*[Which student]_i do you wonder **whether** t_i read the book? (Oka 1993 : (65a))
- (22) a.??Who do you wonder **whether** we believe we can help t_i? (Rizzi 1990: p.80, (19b))
 b.?*Who_i do you wonder **whether** we believe t_i can help us? (Rizzi 1990: p.80, (19a))
 c.?*Who_i do you wonder **whether** John said t_i came? (Lasnik and Saito 1984 : (124a))
 d.*How_i do you wonder **whether** we believe we can help Bill t_i? (Rizzi 1990: p.80, (19c))

ここで、他の Wh 要素とは異なり、*whether* が embd.C に付与された素性 [*Q*] と EPP 素性の双方と同時に照合関係を形成すると考えてみよう。つまり、[+Finite] CP 内にある *whether* による照合操作が最大化原理に従うと考えてみよう (後述する (32b) の用例に関連して指摘するように、不定法節内に生起する *whether* はこの最大化原理に従う必要はない)。これにより、(21b) は周道的と予測されることになる。同じく主語 Wh 要素が移動する (21c) の非文性と (22b-c) の周辺性に留意されたい。(21c) において、*whether* と主語痕跡 (t_i) は隣接する。(21c) の非文性は、*that* - 痕跡フィルター (*that* - Trace Filter) に還元されるであろう (ミニマリストプログラムにおける *that* - 痕跡フィルターの分析に関しては、

Browning (1996) を参照)。Rizzi (1990 : p.81) が指摘するように, (22b) のタイプは (22a) のタイプよりも認容度が多少落ちるが, ECP によって排除される (22d) とは異なるものである。認容度の相違については不明な点が多いが, 本稿の仮説群は (22a) と (22b-c) を周辺のと予測する。¹⁰⁾

以下のペアは, D-Linked Wh 要素としての解釈を許さない Wh 要素 (Agressively Non-D-Linked Wh-Phrase) が embd.C の EPP 素性を照合・削除できないことを物語る。同様のことは, 度量句 (Measure Phrase) と慣用句要素 (Idiom Chunk) を含む準項句 (Quasi-Argument) についても当てはまる。

- (23) a. [Who the hell]_i do you think that John loved t_i? (Oka 1995 : (23a))
 b. * [Who the hell]_i do you wonder **whether** John loved t_i? (Oka 1995 : (23b))
- (24) a. [How much]_i do you think that the computer cost t_i? (Oka 1995 : (24a))
 b. * [How much]_i do you wonder **whether** the computer cost t_i? (Oka 1995 : (24b))
- (25) a. [What headway]_i do you think that you can make t_i on this project? (Rizzi 1990 : p.79, (13a))
 b. * [What headway]_i do you wonder **how** to make t_i on this project? (Rizzi 1990 : p.79, (14a))

3. 不定法 Wh 島について

本稿の仮説群は, [+Finite] Wh 島内部からの移動用例である (26a) と (26b) の相違を適切に説明する。

- (26) a. *_i [Qué coche]_i no sabes cómoj repararon t_i? (Contreras 1999 : (73))
 ‘Which car don’t you know how they fixed?’
 b. _i [Qué coche]_i no sabes cómoj lo_i repararon t_i? (Contreras 1999 : (74))
 ‘Which car don’t you know how they fixed (it)?’
 c. _i [Qué coche]_i no sabes cómoj reparar t_i? (Contreras 1999 : (71))
 ‘Which car don’t you know how to fix?’

(26a) において, vP に付加した位置に生成される付加語 Wh 要素 (*cómo* ‘how’) の始発点は DO Wh 要素 (*qué coche* ‘which car’) の始発点である V の Sister 位置よりも上位に指定される。embd.C の尖端部の中でより上位にある当該付加語 Wh 要素は embd.C に付与された ECP 素性を照合・削除できない。つまり, この付加語 Wh 要素は matrix C の素性 [*Q*] と照合関係を形成することはできない。結果として, (26a) の派生は崩壊する ((26a) を基本的に適格と判断する話者グループについては, 註 (4) を参照)。DO Wh 要素に対応する再述接語を随伴する (26b) は適格と予測される。これは, 再述接語を随伴する DO Wh 要素の始発点として, vP に付加した位置よりも上位の Spec(Agr-DO) が指定されるため

であった。

それでは、不定法 Wh 島内部から DO Wh 要素が移動する (26c) の適格性は、どのように説明されるであろうか (不定法形態の動詞は太字波線で表記する)。ここで、不定法形態が再述接語の随伴と同じ効果をもたらしている点に留意されたい。不定法 Wh 島内部において、DO Wh 要素の始発点として、Spec(Agr-DO) が指定されると考えてみよう。この Spec(Agr-DO) は付加語 Wh 要素 (*cómo* 'how') の始発点 (その生成位置) よりも上位であるため、(26c) は適格と予測されることになる。(27) の用例も同様である。[+Finite] Wh 島が関与する (27a) の用例が示すように、付加語 Wh 要素 (*con qué* 'with what') は DO Wh 要素よりも上位に生成される (仮に、当該付加語 Wh 要素が vP に付加した位置に生成されると考える)。(27b) における不定法 Wh 島内部に生成される DO Wh 要素の始発点として Spec(Agr-DO) が指定されることになる。これにより、(27b) は適格と予測されることになる。(28b) の用例も同様である。(28a) が示すように、IO Wh 要素 (*a quién* 'to whom') の始発点 (Spec(Agr-IO) は DO Wh 要素 (*cuál de éstos* 'which of these') の始発点 (その生成位置) よりも上位にある。本稿の (16b) の場合と同様に、(28b) は適格と予測されることになる ((16b) を (28c) として再掲する)。

- (27) a.*Ésta es la foto quei Juan no sabía [con qué]_j habían pegado los chicos (Torrego 1984 : (60b))

‘This is the photo that John didn’t know with what the boys had glued.’

- b. Ésta es la foto quei Juan no sabía [con qué]_j pegar ti t_j? (Torrego 1984 : (60a))

‘This is the photo that John didn’t know with what to glue.’

- (28) a.*_i[Cuál de éstos]_i dices que no sabes [a quién]_j le_j regaló Juan ti t_j? (Torrego 1984 : (61b))

‘Which of these do you say that you don’t know to whom John gave (to him)?’

- b._i[Cuál de éstos]_i dices que no sabes [a quién]_j regalarle_j ti t_j? (Torrego 1984 : (61a))

‘Which of these do you say that you don’t know to whom to give (to him)?’

- c._i[Qué libro]_i no sabías [a quién]_j se_j lo_j había regalado Bri ti t_j el sábado? (Suñer 1991 : (10c))

‘Which book didn’t you know to whom Bri had given (it to him) on Saturday?’

DO Wh 要素の始発点として Spec(Agr-DO) が指定されるのは、不定法 Wh 島内部から移動、あるいは対応する再述接語を随伴する場合に限定されるものではない。[+Finite] Wh 島内部に *está organizando* のような [*estar* + 現在分詞] の動詞形態が生起する (29b)、あるいは不定詞補文を選択する再構造化動詞 (Restructuring Verb) が生起する (30b) においても、Spec(Agr-DO) が DO Wh 要素の始発点として指定される。(27a) と (27b) の相違を説明する論法は、(29b) を適格と予測する。同様に、(28a) と (28b) の相違を説明する論法は、(30b) を適格と

予測する。¹¹⁾

- (29) a.*Ésta es la foto quei Juan no sabía [con qué]_j habían pegado los chicos ti t_j (= (27a))
 ‘This is the photo that John didn’t know with what the boys had glued.’
 b.¿Quéí dices que no sabes [con quién]_j **está** la gente **organizando** ti t_j? (Torrego 1984 : (55))
 ‘What do you say that you don’t know with whom people are organizing?’
- (30) a.*¿Quéí dices que no te explicas [a quién]_j **le**_j ha comprado Juan ti t_j? (= (15a))
 ‘What do you say that you don’t understand for whom John has bought?’
 b.¿Quéí no sabes [a quién]_j **querían** sus amigos **regalarle**_j ti t_j? (Torrego 1984 : (58))¹²⁾
 ‘What don’t you know to whom his friends wanted to give (to him)?’
- (31) a.¿[Por quién]_i dice que no recuerda nadie [qué rescate]_j había pagado la empresa ti t_j?
 (Bouchard 1984 : p.105, (91))
 ‘For whom do you say that nobody remembers what ransom the company had paid?’
 b.¿[Qué preso]_j dices que no sabes [por qué otro]_i **iban a canjear**_j ti t_j? (Torrego 1984 : (59))
 ‘What prisoner do you say that you don’t know for what other one they were going to exchange?’

(31a) の適格性は、交換・対価を表す PP Wh 要素 (*por quién* ‘for whom’) が V に下位範疇化されることを示し、その始発点は DO Wh 要素の始発点（その生成位置）よりも上位と指定される。当該 PP Wh 要素の生成位置が Spec(Agr-DO) よりも下位であるとする、(31b) の適格性が導出されることになる。

次に、英語の不定法 Wh 島内部からの Wh 移動について考える。以下の用例 (32) から判明するように、英語の不定法 Wh 島内部からの項 Wh 要素の摘出移動は完全に文法的ではないが、その認容度は大幅に改善される（[+Finite] Wh 島の場合と同様に、付加語 Wh 要素の長距離移動は排除される）。付加語によって導入される不定法 Wh 島内部からの移動用例である (32c) が示すように、このタイプの移動を完全に文法的と判断する話者グループの存在も確認される。

- (32) a.(?) [Which car]_i did John tell you how_j to fix ti t_j? (Chomsky 1986 : p.37, (79a))
 b.(?) [Which car]_i did he wonder **whether** to fix ti? (Chomsky 1986 : p.37, (79b))
 c. What_i do you wonder how_j to explain ti t_j? (Oba 2000 : (4a))
 d.*How_j do you wonder what_i to fix ti t_j? (Oba 2000 : (4b))

この認容度の改善プロセスは、基本的に対応するスペイン語の用例を説明する論法に並行するものである。英語の不定法 Wh 島内部に DO Wh 要素が生起する派生において、Spec(Agr-DO) が当該 DO Wh 要素の始発点を形成すると考えてみよう。スペイン語では、embd.C の先端部の中でより下位に位置する Wh 要素が移動先で発音されると想定された。(32a-c) の用例は、対応する英語の不定法 Wh 島におけるこの発音規則が周辺的に適用されると考えることによって説明さ

れるであろう ((32b) は、最大化原理が *whether* で導入される不定法 Wh 島内部で適用されないことを物語るであろう)。

Chomsky (1986 : p.37) は、付加語 Wh 要素によって導入される不定法 Wh 島内部内部からの移動する派生が、項 Wh 要素によって導入される不定法 Wh 島内部からのそれよりも高い認容度を付与される指摘する。具体的には、(32a-b) の認容度が (33a-b) のそれよりも高いと指摘する。既に述べたように、(32a) のような付加語 Wh 島内部から移動するタイプを完璧に文法的と判断する話者グループの存在も確認される。同じ傾向は、Boyd (1992) が挙げる用例 (34a, b) においても観察される。

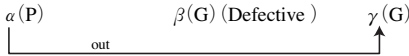
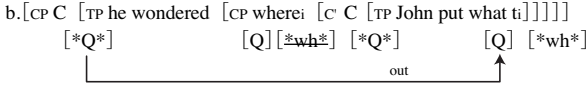
- (33) a.?(?) What_i did you wonder [to whom]_j to give t_i t_j? (Chomsky 1986 : p.36, ((77c))
 b.?(?) [To whom]_j did you wonder what_i to give t_i t_j? (Chomsky 1986 : p.36, (77d))
- (34) a. [Which tomatoes]_i didn't you know how_j to plant t_i t_j? (Boyd 1992 : p.32, ((35a))
 b.??[Which guy]_i didn't you know what_j to give t_i t_j? (Boyd 1992 : p.32, ((35b))
 c.??What_i did you wonder [how (well)]_j he did t_i t_j? (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (i))
 d.??[Which book]_i do you wonder [how (well)] the students read t_i?
 (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (ii))

これは、[+Finite] Wh 島内部の場合とは異なり、不定法 Wh 島内部における「付加語 Wh シフト」が合法的に適用されると考えることによって説明される。[+Finite] Wh 島内部における「付加語 Wh シフト」の適用は周延的に適用される点に留意されたい。これは、本稿の (19a-b) によって示される ((19a-b) を (34c-d) として再掲する)。

ここで、不定法 Wh 島の事象を取り扱う Obata (2006a) に検討を加える。Obata (2006a) においては、Wh 島の制約は Chomsky (2000) の欠陥要素介入制約 (Defective Intervention Constraint, DIC) に還元される。ある一定の条件下で、不定法 Wh 島内部において DIC の適用を免れる効果をもたらす操作が想定される。

Chomsky (2000) は、素性照合を一致操作 (Agree) によって説明する分析を提案する。ゼロ範疇に付与された解釈不可能な素性 (探査要素 (Probe, P)) は、解釈可能な同じ素性をもつ目標要素 (Goal, G) によって照合されることにより削除される。同時に解釈不可能な素性を含む G がはじめて P を照合できると考えられている (P を照合した時点で、G が含む解釈不可能な素性も削除される)。G は P の領域 (Domain of P, D (P)) 内にあり、局所要件 (Locality) を満たす必要がある。¹³⁾

(35) Defective Intervention Constraint (DIC):

(36) a.*What_i did he wonder [where_j [John put t_i t_j]]?c.[CP C [TP he wondered [CP where_i [C' C [TP to put what t_i t_j]]]]]

Wh 島の制約を示す (36a) の非文性は, (35) の DIC によって説明される。embed.CP 内において, Wh 要素 (*where*) は照合に参加し Spec(C) へ移動しているため, 欠陥要素となりその照合能力を失う。一方, 一致操作に参加していない Wh 要素 (*what*) は, その素性 [*wh*] を保持し照合能力をもっている。matrix C の素性 [*Q*] に対してこの Wh 要素 (*what*) のもつ素性 [Q] を G とする派生は, DIC によって排除される。前述のように, embed.Spec(C) へ移動した欠陥 Wh 要素 (*where*) は, その照合能力を失っている。matrix C の素性 [*Q*] が照合・削除されないため, この派生は崩壊する。しかしながら, DIC によるこの論法は, 本稿の (2a) のような英語の用例, また適格と判断される (5a) のようなスペイン語の用例を非文と予測することになる。

Obata (2006a) は, ある一定の条件下で, (36c) のような不定法 Wh 島を構成する Wh 要素の欠陥性 (Defectiveness) が見えなくなると考える。具体的には, C の素性 [*Q*] が A 位置にある Wh 要素の素性 [Q] と照合関係を形成する場合に限り, この欠陥性の「不可知化」が発動すると想定する (この「不可知化」に関する理論的な解釈・意味づけについては, Obata (2006a) を参照)。例えば (37b) において, t_i は Wh 要素 (*which book*) の原初痕跡であるため A 位置にある。不定法 Wh 島内部で欠陥性の「不可知化」が発動するため, (37b) は適格と予測される。vP がフェイズを構成すると考えた場合, 素性 [*Q*] を付与された matrix C は A' 位置である v の先端部にある DO Wh 要素と照合関係を形成することになる。これが妥当であれば, (37b) は非文と予測されることになる。このことは, vP がフェイズを構成しないことを物語るものであろう。(37c) において matrix C の素性 [*Q*] と照合関係を形成するのは, A' 位置 (Spec(C₂)) に生起する DO Wh 要素である。欠陥性の「不可知化」が発動しないため, 当該用例は DIC によって排除されることになる。

- (37) a.??[Which book]_i did John ask Mary [when_j he should buy t_j ti]? (Obata 2006a : (1a))
 b.[Which book]_i did John ask Mary [C_{1P} when_j [T_{1P} to buy t_j ti]]? (Obata 2006a : (1b))
 c.*[Which book]_i did John ask Mary [C_{1P} when_j to decide t_j [C_{2P} ti to buy t_j ti]]? (Obata 2006a : (6c))

しかしながら、Obata (2006a) の論法は問題を引き起こす。(34a) と (34b) の相違が説明されない。Obata (2006a) の論法は、(34a) と (34b) に対して同程度の認容度を付与することになる。既に述べたように、本稿の論法は不定法付加語 Wh 島内部からの項 Wh 要素の移動を適格と予測する。これは、不定法 Wh 島における DO Wh 要素の始発点としての Spec(Agr-DO) 指定と「付加語シフト」の合法的適用のためであった。Obata (2006a) の論法は、更なる予測上の問題を引き起こす。次の (38) の相違も、説明不能である。

- (38) (Pesetsky 1982 : p.269, (35a);(35b))
 a. ?chess, which_j I wonder [C_{1P} who_i [T_{1P} you believe [T_{2P} ti to play t_j well]]]
 b. *John, who_i I wonder [C_{1P} [what game]_j [T_{1P} you believe [T_{2P} ti to play t_j well]]]

(38a-b) の双方において関与するのは [+Finite] Wh 島であるため、C₁ 素性の欠陥性の「不可知化」が発動しない。つまり、(38a-b) は共に DIC によって排除されることになる。

本稿の仮説群によれば、(37b) の不定法 Wh 島内部生成される DO Wh 要素の始発点として Spec(Agr-DO) が指定されることになる (Spec(Agr-DO) が付加語 Wh 要素 (when) の始発点 (生成位置) を C 統御することになる)。つまり、C₁ のフェイズの先端部の中で上位にある DO Wh 要素 (which book) が長距離移動することになる。(37b) の適格性説明する論法により (37c) は生成不能、つまり不適格と予測されることになる。これは、付加語 Wh 要素 (when) が C₁ のフェイズの先端部の中で上位の位置を占めることになるためである。本稿の仮説群によって、(38a) と (38b) の相違も適格に説明される。これは、不定法 TP 内に生成される DO Wh 要素 (which, what game) の始発点として、この不定法 TP 内にある Spec(Agr-DO) が指定されるためである (当該 Spec(Agr-DO) がもう一方の Wh 要素 (who) の始発点 (その生成位置) を C 統御する)。つまり、C₁ のフェイズの先端部の中で上位にある DO Wh 要素 (which, what game) が長距離移動することになる。英語の関係詞 Wh 要素が D-Linked Wh 要素として機能すると考えてみよう。この場合でも、(38a) の DO Wh 要素 (which) の始発点として T_{2P} 内の Spec(Agr-DO) が指定されるため、当該用例は基本的に適格と予測されることになる。(38b) において、D-Linked Wh 要素として機能する関係詞主

語 Wh 要素 (*who*) の始発点として Spec(T2) が指定されると考えてみよう。この場合、主語 Wh 要素 (*who*) が長距離移動する派生が適格と予測される。つまり、(38b) の非文性は、Spec(T) が Spec(v) に生成される D-Linked Wh 要素の始発点を構成しないことを物語る (本稿の (19c) も参照されたい)。

4. 結び

英語とスペイン語の不定法 Wh 島内部からの Wh 要素移動事象説明は、当該島内部における DO Wh 要素の始発点として Spec(Agr-DO) が指定されると想定することにより導出されると考えられる。既に述べたように、本稿の論法は (37c) を不適格と予測する。しかしながら、Richards (2002) は、(37c) のタイプである (39a) を基本的に適格と判断する。

(39) (Richards 2002 : (37a);(37c);(37b))

- a. What_i are you wondering [C1P how_j [T1P to try t_j [C2P [T2P to repair t_i]]]]?
- b.*What_i are you wondering [C1P how_j [T1P John tried t_j [C2P [T2P to repair t_i]]]]?
- c.*What_i are you wondering [C1P how_j [T1P to persuade John t_j [C2P [T2P to repair t_i]]]]?

Obata (2006a) の論法は、(39a) を不適格と予測する。これは、C1P フェイズにおいて Wh 要素 (*what*) が A' 位置である Spec(C2) から C1 の先端部へ移動する関係で、付加語 Wh 要素 (*how*) の欠陥性の「不可知化」は発動しないためである。つまり、matrix C の素性 [*Q*] が照合・削除されないため、(39a-c) の派生はすべて非文と予測されることになる (この問題は、Obata (2006b, fn.2) 自身も指摘している)。本稿の仮説群もまた、(39a-c) を非文と予測する。これは、付加語 Wh 要素 (*how*) の始発点 (生成位置) が DO Wh 要素 (*what*) の始発点 (T2P 内の Spec(Agr-DO)) よりも上位に指定されるためである。結果として、付加語 Wh 要素 (*how*) が C1 の先端部の中で上位の位置を占める (当該付加語 Wh 要素は、C1 の EPP 素性を照合・削除不可能であるため、matrix C の素性 [*Q*] と照合関係を形成することはない)。つまり、(39a-c) のすべてが生成不能となる。(40) と (41) においても、(39a) に類似する問題の存在が確認される。t_j が t_i を C 統御すると考えると、(40a) と (41a) が非文と予測されることになる ((40b) と (41b) は周辺的であるが容認されると予測される)。

(40) (Pesetsky 1982 : p.270, (43a);(43b))

- a.?He wrote more articles than_i I could imagine [C1P who_j [T1P to ask t_j [C2P [T2P to read t_i]]]]?
- b.*More people came than_j I could imagine [C1P [what articles]_i [T1P to ask t_j [C2P [T2P to read t_i]]]]?

(41) (Pesetsky 1987: (42a);(22b))

- a.?[What book]_i don't you know [_{CP} who_j [_{T1P} to persuade t_j [_{C2P} [_{T2P} to read t_i]]]]]?
 b.*Who_j don't you know [_{CP} [what book]_i [_{T1P} to persuade t_j [_{C2P} [_{T2P} to read t_i]]]]]?

ここで、例えば (39a) における不定法形態の動詞に選択された C2 の最上位尖端部へ移動した DO Wh 要素の始発点が当該 C2P の生成位置によって代替される話者グループの存在を想定してみよう (この始発点の代替を「CP 代替」と呼ぶことにする)。Spec(C2) へ移動した Wh 要素 (*what*) の始発点が DO CP である C2P の生成位置によって代替され、同時に当該 C2P が不定法 T1P 内部に生起するため、C2P の始発点として T1P 内の Spec(Agr-DO) が指定されることになる。この T1P 内の Spec(Agr-DO) がもう一方の Wh 要素 (*how*) の始発点 (その生成位置) を C 統御するため、DO Wh 要素 (*what*) が長距離移動する (39a) の派生が生成されることになる。不定法 CP 内における「付加語 Wh シフト」が合法的に適用されるため、(39a) は完全に文法的と予測されることになる。(39b) の T1P が [+Finite] TP であるため、その代替始発点である C2P の生成位置そのものが Wh 要素 (*what*) の始発点となる (T1P 内部の Spec(Agr-DO) が当該 Wh 要素の始発点になることはない)。結果として、(39) の派生は崩壊することになる。(39c) の非文性は、この「CP 代替」が不定法形態の V と当該 V が選択する CP との隣接を要求することを物語る。(39a) のタイプが非文と判断されるグループでは、この「CP 代替」が発動しないことになる。

同様の論法は、(40) と (41) に対して問題を引き起こすように思われる。Spec(C2) に一時停止した DO Wh 要素 (*than, what book*) に対する「CP 代替」の適用により、当該 DO Wh 要素の始発点として T1P 内の Spec(Agr-DO) が指定される。当該 Spec(Agr-DO) は、T1P 内部にある Wh 要素 (*who_j*) の痕跡 (*t_j*) よりも上位にあると言えるであろうか。ECP 構文と同様に、目的語コントロール構文における当該痕跡 (*t_j*) が T1P 内の Spec(Agr-DO) 位置にあると考えてみよう。この前提の下では、両 Wh 要素間の始発位置関係が特定されないことになる。具体的には、外部の Spec(あるいは、Agr-DOP に付加した位置) と内部の Spec (Spec(Agr-DO)) との位置関係が自由に逆転可能となる、つまり、(40a) と (40b) の双方対して、適確な派生が想定可能となる ((41a, b) も同様である)。この問題は、(40) と (41) が属する目的語コントロール構文に対して、ECM に類似する派生を想定することにより打開されるであろう (cf. Hornstein (1999; 2007))。具体的には、(40) と (41) における主語 Wh 要素の生成位置は、V (*ask, persuade*) の直接右方の *t_j* でなく、T2P 内の Spec(v) であると考ええる (当該 V

(ask, persuade) が TP を選択すると考える)。つまり、(40a, b) と (41a, b) の構造として、(42a, b) と (43a, b) が想定されることになる。

(42) (Pesetsky 1982 : p.270, (43a);(43b))

a.?He wrote more articles than_i I could imagine [C1P who_j [T1P to ask t_j [T2P to [vP t_j read t_i]]]]?

b.*More people came than_j I could imagine [C1P [what articles]_i [T1P to ask t_j [T2P to [vP t_j read t_i]]]]?

(43) (Pesetsky 1987 : (42a);(22b))

a.?[What book]_i don't you know [C1P who_j [T1P to persuade t_j [T2P to [vP t_j read t_i]]]]?

b.*Who_j don't you know [C1P [what book]_i [T1P to persuade t_j [T2P to [vP t_j read t_i]]]]?

主語 Wh 要素 (*who*) は、T1P 内へ移動すると考える。(ECM 構文に対して、Lasnik (1999b, 202) は、この T1P 内にある移動先として Spec(Agr-DO) を想定する)。この Spec(Agr-DO) は、当該主語 Wh 要素の始発点を構成することはないと考えられる。これにより、(40) と (41) の相違が説明可能となる。(40a) と (41a) の T1P 中の Spec(Agr-DO) が長距離移動する DO Wh 要素の始発点となる。この Spec(Agr-DO) が主語 Wh 要素 (*who*) の始発点 (Spec(v)) を C 統御するため、(40a) と (41a) は容認可能となる。(39a) と異なるのは、短距離移動する Wh 要素の移動先での発音が周辺的に適用されるため、(40a) と (41a) の認容度が多少低下する点である。(40b) と (41b) は、長距離移動する主語 Wh 要素の始発点 (spec(v)) が DO Wh 要素の始発点を C 統御していないため、生成不能となる。結果として、(40) と (41) においては、「CP代替」は適用されない。¹⁴⁾

ここで、(40) と (41) における T1P が不定法 TP である必要はない点に留意されたい。この論法は、(40) と (41) の T1P が [+Finite] TP で実現された ECM 構文に対しても同様の相違の存在を予測する。この予測は、以下の用例 (44) によって例証される (V(*prove*) は ECM 構文を導入する)。(44a) において、Spec(C3) へ移動した DO Wh 要素 (*what*) に対して「CP代替」が適用され、当該 DO Wh 要素の始発点として不定法 T2P 内の Spec(Agr-DO) が指定される。この Spec(Agr-DO) が主語 Wh 要素 (*who*) の始発点 (Spec(v)) を C 統御するため、DO Wh 要素 (*what*) が長距離移動する (44a) の認容度は、主語 Wh 要素 (*who*) が長距離移動する (44b) よりも高いと予測される ((44a) と (44b) の双方において、Spec(C1) にある Wh 要素は発音規則に違反するが)。付加語 Wh 要素 (*when*) に対する「CP代替」の適用は許容されないため、主語 Wh 要素 (*who*) が長距離移動する (44d) の認容度は、付加語 Wh 要素 (*when*) が長距離移動する (44c) よりも高いと予測される。¹⁵⁾

- (44) (Oka 1993 : (47a); (48a); (47b); (48b))
- a. ??What_i do you wonder [C_{1P} who_i I believe ti [T_{2P} to [vP ti have said [C_{3P} tj that [T_{3P} Mary bought tj]]]]]?
 - b. *Who_i do you wonder [C_{1P} what_i I believe ti [T_{2P} to [vP ti have said [C_{3P} tj that [T_{3P} Mary bought tj]]]]]?
 - c. *When_j do you wonder [C_{1P} who_i I believe ti [T_{2P} to [vP ti have said [C_{3P} tj that [T_{3P} Mary bought it tj]]]]]?
 - d. ???Who_i do you wonder [C_{1P} what_j I believe ti [T_{2P} to [vP ti have said [C_{3P} tj that [T_{3P} Mary bought it tj]]]]]?
 - e. ...

この種の「CP 代替」は英語に限定されるものではない。以下のスペイン語の用例もまた、この「CP 代替」によって説明されるであろう（不定形態の動詞は太字波線で表示する）。(45a)において、長距離移動する DO 関係詞 Wh 要素は付加語 Wh 要素（*dónde* 'where'）によって導入される [+Finite] Wh 島内部から移動できない。

- (45) (Bordelais 1986 : (62); (63); (68))
- a. *el libro que_i no sé [C_{1P} [a quién]_j preguntaste tj [C_{2P} dónde_k había publicado Juan ti tk]]...
 - 'the book that I don't know whom you asked where John had published...'
 - b. el libro que_i no sé [C_{1P} [a quién]_j preguntar tj [C_{2P} dónde_k publicar ti tj]]...
 - 'the book that I don't know whom to ask where to publish...'
 - c. El único problema que_i aun no sé [C_{1P} [a quién]_j preguntar tj [C_{2P} cuándo_k afrontar ti tk]]
 - es el más delicado.
 - 'The only question that I do not yet know who to ask when to face is the most delicate.'

これは、当該 DO 関係詞 Wh 要素の始発点であるその生成位置が付加語 Wh 要素（*dónde* 'where'）の始発点（vP に付加した位置）に C 統御されるためである（Torrego (1984 : f.25) も指摘するように、スペイン語における Wh 島内部からの移動に関して、疑問詞と関係詞の間には異同が観察されない点に留意された）。つまり、(45a) は非文と予測されることになる。(45b-c) における DO 関係詞 Wh 要素は、2つの不定法 Wh 島を越えて移動する。例えば (45c) の不定法 Wh 島（C_{2P}）内部において、長距離移動する DO 関係詞 Wh 要素の始発点として Spec(Agr-DO) が指定される。当該 Spec 位置が付加語 Wh 要素（*cuándo* 'when'）の始発点（vP に付加した位置）を C 統御するため、DO 関係詞 Wh 要素は C₂ の最上位先端部へ移動する。最上位先端部の位置にあるこの DO Wh に対して「CP 代替」が適用されるため、その始発点として不定法 Wh 島（C_{1P}）内部の Spec(Agr-DO) が指定される。この DO Wh 要素は、C₁ の最上位先端部へ移動可能であるため、不定法 Wh 島（C_{1P}）内部から脱出可能となる。¹⁶⁾

註

- 0) 本稿の匿名レフリーから本稿が立脚する理論上の問題点と論文構成上の不備と思われる箇所の指摘をいただいた。ここに、謝意を表する次第です。
- 1) [+Finite] CP である Wh 島内部からの Wh 要素の移動が基本的に排除される英語の話者グループも存在する。つまり、この話者グループにおいては、(2a) は (1a) と (2b-d) よりも認容度が高くなる傾向が認められるが、基本的に不適格と判断される。換言すれば、当該話者グループにおいては、後述する「最大化原理」(Maximization Principle) が厳密に適用されると考えられる。
- (5) と (6) にあるスペイン語の用例からもわかるように、当該言語の状況は、対応する英語の状況とは異なるものである。一律に Wh 島内部からの移動が排除されるのではなく、一定の構造条件を満たす場合に限り、Wh 島内部からの項 Wh 要素の移動が許容される。スペイン語の用例において、文頭と文末に疑問符が付される点に留意されたい(文頭の疑問符は、反転形 (i) で用いられる)。文頭の反転疑問符 (i) と、文法性判断の疑問符 (?,*)との相違に注意されたい。
- 2) ここまでの英語に関する記述は、Ishii (2000) による(詳細は、当該論文を参照されたい)。英語では、同一の CP 内における多重疑問文 (Multiple Question) が許容されない。これは、当該言語において多重 Spec (Multiple Spec) 構造が存在しないことを物語ると考えられる (Ishii 2000 : p.321)。これにより、(1a) の派生に対応する構造 (8c) において、embd.C の先端部 (Edge) に二つの Wh 要素が生起することはない ((1a) と (1b) が生成不能として、不適格と予測される)。本稿では、(8c) に類似する embd.CP への付加移動を想定する。後述するように、この付加移動の引き金は embd.CP フェイズ内にあると考えられる。
- 3) イタリア語では、V に下位範疇化され D-Linked Wh 要素として機能する PP Wh 要素が EP 素性と照合関係を形成可能と思われる (イタリア語における Wh 島の事象に関しては、稿を改めて検討する)。(10b) の周辺性に関しては、後述する。Akahane (2006) においては、embd.C の先端部における Wh 要素の位置関係が直接関与しない点に留意されたい。後述するように、本稿の仮説群では、この embd.C の先端部構造が重要な役割を果たすことになる。
- 4) Spec (Agr-DO) が D-Linked DO Wh 要素の始発点を構成する要因は何であろうか。本稿の匿名レフリーが一つの可能性として指摘するのは、再述接語がもつ何らかの素性が Agr-DO と一致することによって発動する Spec (Agr-DO) の活性化である。同じレフリーは、後述する不定法 Wh 島内部における DO Wh 要素の始発点として Spec (Agr-DO) が指定される派生にも、この活性化を適用する (この不定法 Wh 島内部における始発点の Spec (Agr-DO) 指定は D-Linked Wh 要素に限定されるものではなく、一般の DO Wh 要素に対して適用される)。更なる論考が必要であるが、仮に以下のように考えてみよう。[+Finite] TP 内における V の Sister 位置は、Spec (Agr-DO) よりも活性度が高い (よって、DO Wh 要素の始発点として当該 Sister 位置が指定される)。DO Wh 要素に対応する再述接語が生起する派生では、Spec (Agr-DO) の活性度が V の Sister 位置よりも高い (このため、Spec (Agr-DO) が始発点に指定される)。一方不定法 [-Finite] TP 内部では、V の Sister 位置の活性度が Spec (Agr-DO) よりも低くなる (Spec (Agr-DO) が DO Wh 要素一般の始発点となる)。
- 5) 以下の用例からも判明するように、一方の Wh 要素 (例えば *por qué* ‘why’, *por qué razón* ‘for which reason’) が Spec (C) 位置に生成される場合には、移動の適用を受ける Wh 要素が CP に付加した位置へ移動すると考えなければならない (参考に、C の実現形態と考えられる *si* (whether) の用例も付加する)。この種の Wh 島内部からの移動は項 Wh 要素に限定される。これは、付加語 (*por qué*)、あるいは C(*si*) が embd.C の素性 [*Q*] を照合・削除すると考えることによって説明される (長距離移動する Wh 要素として、embd.C の EPP 素性を照合・削除する Wh 要素、つまり項である Wh 要素が指定されることになる)。

- (i) a.¿Quéí dices que no te explicas **por qué** Juan se habrá comprado ti? (Torrego 1984 : (46a))
 ‘What do you say that you don’t understand why Juan will have bought?’
 b.¿[Qué diccionario]i no sabías **si** Celia había devuelto ti ya (Torrego 1984 : (47a))
 ‘Which dictionary didn’t you know whether Celia had returned already?’
 c.¿Quiéni no sabes **si** alquiló ti la casa? (Demonte 1987 : (20b))
 ‘Who don’t you know whether rented the house?’
 d.*¿[Por qué razón]i pregunta **si** Hitch adoraba a Kelly ti? (Uriagereka 1988: p.135, (95))
 ‘Why does he ask whether Hitch adored Kelly?’

(i) における付加語 Wh 要素 (*por qué* ‘why’, *por qué razón* ‘for which reason’) は S-V 倒置を要求しない。これは、当該付加語 Wh 要素が Spec(C) 位置に生成されることに還元される (スペイン語の S-V 倒置に関しては, Zubizarreta (2001) に立脚する石岡 (2007) を参照されたい)。同様に S-V 倒置を要求しない他の付加語 Wh 要素の島内部からの項要素の移動が許容される。

- (ii) a.¿**Cuándo** Juan consiguió por fin abrir la puerta ayer? (Torrego 1984 : (15c))
 ‘When did John finally get to open the door yesterday?’
 b.¿**Cómo** Juan ha conseguido meter allí a su hijo? (Torrego 1984 : (15c))
 ‘How has John managed to get his son in there?’
- (iii) a.¿És este el libro quei no sabías **cuándo**j te habían devuelto ti ti? (Torrego 1984 : fn.32, (i))
 ‘Is this the book that you didn’t know when they had returned to you?’
 b.¿[Qué casa]i no te explicas **cómo**j habrán vendido ti ti? (Torrego 1984 : fn.32, (ii))
 ‘What house don’t you understand how/ how come they will have sold?’

Contreras が属する話者グループにおいて、付加語 Wh 要素 (*cuándo*, *cómo*) は S-V 倒置を要求する (iv)。これに連動して、当該付加語 Wh 島内部からの項要素の移動は排除される (v)。この話者グループにおいて、これらの付加語は vP 付加した位置に生成されると考えられる。

- (iv) a.¿Cuándo leyó María el libro? (Contreras 1991 : (34a))
 a’.*¿Cuándo María leyó el libro?
 ‘When did Mary read the book?’
 b.¿Cómo volvió Juan? (Contreras 1989 : (18b))
 b’.*¿Cómo Juan volvió? (Contreras 1989 : (18a))
 ‘How did John return?’
- (v) a.*¿[Qué coche]i no sabes cuándoj repararon ti ti? (Contreras 1994 : (16))
 ‘Which car don’t you know when they fixed?’
 b.*¿[Qué coche]i no sabes cómoj repararon ti ti? (Contreras 1999 : (73))
 ‘Which car don’t you know how they fixed?’

- 6) 従来の Spec(AgrO) (本稿では, Spec(Agr-DO) と表記する) を v の外部の Spec 位置と見なしている。Spec(Agr-DO) と Spec(Agr-IO) が交替可能であるとすれば, (16b) に対応する以下の (i) もまた、適格と予測されることになる (未検証)。(16b) と (i) における *se* が IO 接語 (*le*) の変異形である点に留意されたい (*le lo* → *se lo*)。この予測の妥当性は, Torrego (1984 : fn.38) の指摘 (ii) によって確認される。

- (i) ¿[A quién]_i no sabías [qué libro]_i sej le_i había regalado Bri ti t_j el sábado?
 'To whom didn't you know which book Bri had given (it to him) on Saturday?'
 (ii) (Torrego 1984 : fn.38) :

Unlike any other verbal complement in the VP, the indirect object in Spanish can freely be *wh*-moved out of an indirect question with V-Preposing.

その一方で, Jaeggli (1982) が提示する (iiia) は問題を惹起するようと思われる。本稿の論法は, (iiia) を適格と予測する ((iiib) は不適格と予測される。(iva) と (ivb) に対しては適切な予測もたらされる)。更なる調査が必要であるが, IO Wh 要素が EPP 素性を照合不可能な話者グループの存在を想定する。つまり, 当該話者グループにおける IO Wh 要素は embd.C の素性 [*Q*] を照合・削除するため, 当該 IO Wh 要素が embd.C の先端部でその照合能力を失い, その移動を停止する。その結果として, (iiia) は生成不能となる。

- (iii) (Jaeggli 1982 : p.170, (4-151b);(4-151a))

- a.*¿[A quién]_i no sabías quéj le_i regalaron t_j ti?
 'To whom didn't you know what they had given (to him)?'
 b.*El único encargo quei no sabías [a quién]_i le_j iban a dar ti t_j cayó justo en tus manos.
 'The only task which you didn't know to whom they would give wound up right in your hands.'

- (iv) (Jaeggli 1988 : p.170, (45a);(45b))

- a.¿Quién no sabes quéj compró ti t_j?
 'Who don't you know what bought?'
 b.*¿Quéj no sabes quién compró ti t_j?
 'What don't you know who bought?'

- 7) ここで, ミニマリストプログラムの観点からスペイン語における Wh 制約を説明しようとする Sabel (2002) が引き起こす問題点に言及する。多重 Spec(C) が前提され, 長距離移動する Wh 要素は, Wh 島を形成する C のより外部の Spec 位置を経由する。この Spec 位置にある中間痕跡が演算子 (Operator) を構成しないため, 当該痕跡は *t と標示される (適切な派生が生成するためには, この中間痕跡 (*t) が削除される必要がある)。この削除が適切に適用されるためには, この中間痕跡が演算子-変項連鎖 (Operator-Variable Chain) の内部にある必要がある (Uniform Chain の内部では, この中間痕跡の削除が適用されない)。演算子-変項連鎖は, 以下の (ia-b) の双方の条件を満たす必要がある。

- (i) a. A' ... (A') ... A (Sabel 2002 : (16))
 b. θ' ... (θ') ... θ

ドイツ語とオランダ語においては, 主語 Wh 要素, 直接目的語 Wh 要素と付加語 Wh 要素の始発点として, θ' 位置が指定される。結果として, 当該言語における主語 Wh 要素, 直接目的語 Wh 要素と付加語 Wh 要素が Wh 島内部から移動する派生は排除される)。スペイン語とイタリア語においては, 主語 Wh 要素の始発点が θ 位置と指定される点を除き, ドイツ語 (オランダ語) と同じ状況であると想定される (Sabel 2002 : p.282)。これにより, (ii) の用例が説明される (Sabel (2002) は, Jaeggli (1988) から (iia) を引用している)。主語 Wh 要素が Wh 島内部から移動可能となる。Sabel (2002) の理論からすれば, その始発点として θ 位置が指定される項としての PP (例えば, 間接目的語 Wh 要素) もまた, Wh 島内部から移動可能と予測される。これは, 本稿の (6a) の Torrego (1984) が提供す

るスペイン語の用例によって示される（便宜上、(6a) を (iiia) として以下に再掲する）。前述のように、Jaeggli (1982) は、(6a) と同じタイプの用例である (iiib) を不適格と判断する。つまり、Sabel (2002) の論法は、スペイン語における話者グループごとの相違を説明できない。既に述べたように、DO Wh 要素が主語 Wh 要素から形成される Wh 島内部から移動する (iia) は不適格と判断される。その一方で、Sabel (2002) は、それに対応する再述接語 (Resumptive Clitic) を随伴する DO Wh 要素が Wh 島内部から移動する用例 (iiic) の適格性を説明できない。

- (ii) a.*¿Quéi no sabes quiénj compró tj ti? (Sabel 2002 : (13a))
 ‘What don't you know who bought?’
 b.*¿Por quéi no sabes quéj comprar tj ti? (Sabel 2002 : (13b))
 ‘Why don't you know what to buy?’
 c.¿¿Quienj no sabes quéi compró tj ti? (Sabel 2002 : (13c))
 ‘Who don't you know what bought?’
- (iii) a.¿[A quién]i dices que no te acuerdas quéj lei has dicho tj ti? (Torrego 1984 : (54a))
 ‘To whom do you say that you don't remember what you have said (to him)?’
 b.*¿[A quién]i no sabías quéj lei regalaron tj ti? (Jaeggli 1982 : p.170, (4-151b))
 ‘To whom don't you know what they had given (to him)?’
 c.¿[Qué libro]i no sabes quiénj loi compró tj ti? (Contreras 1992 : (11b))
 ‘What book don't you know who bought (it)?’

- 8) これは、Contreras (1999) による主語 Wh 要素に関する以下の指摘に呼応するものである。これが妥当であれば、本稿の (15c) に対応して長距離移動する Wh 要素が長距離移動する (iib) もまた適格と予測されることになる ((15c) を (iia) として再掲する)。

- (i) Contreras (1999 : p.1947):
 La existencia de sujetos tácitos permite asociación a diatancia en condiciones que de otro modo no la permitirán. (The existence of understood subjects allows for a long distance association under conditions which will otherwise not permit it.)
- (ii) a.¿[A cuáles de ellos]i sabes quiénj no lesi dio tj una buena recomendación ti?
 ‘Which of them do you know who didn't give (them) a good recommendation?’
 b.¿Quienj sabes [a cuáles de ellos]i no lesi dio tj una buena recomendación ti?(未検証)
 ‘Who do you know which of them he/she didn't give (them) a good recommendation?’

少なくとも Wh 島の現象に関する限り、Chomsky (1995) の等距離 (Equidistance) の概念を採用することはできない。これは、embd.C の先端部位置の中で CP に付加した位置にある Wh 要素が embd.Spec(C) にある Wh 要素よりも matrix C に近いと想定しているためである。以下の (iiib) で例示されるように、多くの話者グループにおいて、Indirect Question (IQ) Wh 島内部からの Wh 要素移動が排除される ((iiia) の embedded CP は、Semi-Question (SQ) Wh 島を形成する)。

- (iii) a.¿Quiéni no recuerdas [sq cuándoj llegó ti tj a este país?](Suñer 1992 : (40a))
 ‘Who don't you remember when arrived in this country?’
 b.¿*Quiéni preguntaste [IQ (que) cuándoj llegó ti tj a este país?](Suñer 1992 : (41a))
 ‘Who did you ask when arrived in this country?’

既に述べたように、付加語 Wh 要素が Wh 島内部から移動することはない (iva)。その一方で、Indirect Question (IQ) と Semi-Question (SQ) の類別に関係なく、V によって選択されない場所の付加語 (*dónde* (where)) が Wh 島内部から移動する方言グループの存在が確認される (ivb) (このグループに関しては、稿を改めて検討する)。

- (iv) a. *?Dónde te preguntas quéj puso Juan tj ti? (Aoun 1986 : p.126, (30))

‘Where do you wonder what Juan put?’

- b. ¿Dónde te preguntas quéj compró Juan tj ti? (Aoun 1986 : p.126, (31))

‘Where do you wonder what Juan bought?’

さらに、Arnaiz (1996) が挙げる Peruvian Spanish の用例も問題を惹起する。本稿の仮説群に対して問題を惹起するのは、(va) と (vd) の適格性である。仮に、Peruvian Spanish における DO D-Linked Wh 要素が対応する再述接語の随伴を随意的に適用すると考えてみよう。これが妥当であれば、(va) に対応して長距離移動する要素が Non-D-Linked Wh 要素である派生 (ve) は、不適格と予測されることになる (未検証)。

- (v) a. ¿[Qué curso]i no sabes quiénj aprobó tj ti? (Arnaiz 1996 : p.38, (58a))

‘Which course don't you know who passed?’

- b. ¿Quiénj no sabes [qué curso]i aprobó tj ti? (Arnaiz 1996 : p.38, (58b))

‘Who don't you know which course passed?’

- c. ¿[Qué curso]i no sabes [por qué]j aprobó Juan ti tj? (Arnaiz 1996 : p.38, (59a))

‘Which course don't you know why Juan passed?’

- d. ¿[Qué curso]i no sabes cómoj aprobó Juan ti tj? (Arnaiz 1996 : p.38, (59b))

‘Which course don't you know how Juan passed?’

- [e. *¿Quéí no sabes quiénj aprobó tj ti?]

‘What don't you know who passed?’

- 9) 以下の用例は、D-Linked (と解釈された) DO Wh 要素と共に起る D-Linked 主語 Wh 要素の始発点として Spec (T) が指定される英語の話者グループの存在を物語ると思われる (DO Wh 要素の始発点として Spec (Agr-DO) が指定される)。Boyd (1992) は、(ib) の認容度が (ia) のそれよりも低下すると指摘する。この前提の下では、(ib) は非文と予測されることになる。

- (i) a. ?(?) Whatj don't you know whoi ti read tj? (Boyd 1992 : p.169, (69a))

- b. *?Whatj don't you know [which person]i ti read tj? (Boyd 1992 : p.169, (69b))

- 10) (22a) と (22b-c) との微妙な差違に関しては、Rizzi (1990 : pp.96-98) を参照。以下の用例において観察される相違は、D-Linked Wh 要素と共に起る *whether* が最大化原理の適用を免れる話者グループの存在を物語ると思われる。

- (i) a. [Which books]i did he ask you **whether** you read ti? (Boyd 1992 : p.156, (56a))

- b. ??What did he ask you **whether** you read ti? (Boyd 1992 : p.156, (56b))

- 11) (29b) の適格性は、[estar + 現在分詞] の動詞形態に現れる現在分詞 [-Finite] TP 内においても、V の Sister 位置の活性度が Spec (Agr-DO) よりも低くなることを物語るのであろう (註 (4) 参照)。
- 12) 本稿の註 (5) で述べたように、Spec (Agr-DO) と Spec (Agr-IO) の位置がお互いに交替可能

であると考えた場合、IO Wh 要素 (*a quién* 'to whom') が再構造化動詞からなる [+Finite] DO Wh 要素 (*qué* 'what') の島内部から移動する派生もまた適格と予測される (未検証)。

- (i) ¿[A quién]_j no sabes qué **querían** sus amigos **regalarle**_j ti t_j?
 'To whom don't you know what his friends wanted to give (them) ?'

13) Probe-Goal System において、以下の (i) が想定される。

- (i) The assumptions for the probe-goal system (Chomsky 2000 : p.122)
 a. Matching is feature identity.
 b. D(P) is the sister of P.
 c. Locality reduces to "closest c-command."

14) Oka (1993 : fn.1) は、Non-D-Linked Wh 要素が生起する (41a) に対応する派生の認容度が大きく低下する話者グループの存在を示す ((41b) に対応する派生は完全に容認不可能と判断される)。同じ話者グループにおいて、D-Linked Wh 要素が生起する派生である (iia) の認容度はかなりの程度上昇する ((iib) は容認不可能と判断される)。

- (i) a.*?What_i did you decide [who_j [to persuade t_j [to [v_P t_j buy t_i]]]]?
 b.*?Who_j did you decide [what_i] [to persuade t_j [to [v_P t_j buy t_i]]]]?
 (ii) a.?[Which book]_i did you decide [[which boy]_j [to persuade t_j [to buy t_i]]]?
 b.*[Which boy]_j did you decide [[which book]_i [to persuade t_j [to buy t_i]]]?

これは、不定法 Wh 島を構成する CP フェイズの尖端部の中でより下位の Wh 要素、つまり短距離移動する Wh 要素の移動先での発音が D-Linked Wh 要素が生起する場合に限り周道的に適用されると考えることによって説明されるであろう。Non-D-Linked Wh 要素が生起する派生では、この移動先での発音がほとんど容認されないことになる。

15) 本稿の仮説群は、Oka (1993) が挙げる以下の用例 (i) の相違を説明できないと思われる。本稿の仮説群は、Wh 要素 (*to whom*) が C2P 内部に生成される Wh 要素よりも上位であると前提した場合、(ic) を周辺のと予測する ((ia-b) は生成不能となる)。[+Finite] TP 内の V (*seem*) が CP を選択する派生において、DO Wh 要素に関する「CP 代替」が適用されると考えてみよう。Wh 要素 (*to whom*) の生成位置 (始発点) が同じ CP 内の Spec (Agr-DO) よりも下位であると考えたと。(ia) は、(ib) よりも認容度が高いと予測される。付加語 Wh 要素 (*when*) に対して「CP 代替」が適用されないため、(id) は (ic) よりも認容度が高いと予測される。

- (i) (Oka 1993 : (43a) ; (44a) ; (43b) ; (44b))
 a.??What_i do you wonder [C1P [to whom]_j it seemed t_j [C2P t_i [TP Mary bought t_i]]]]?
 b.*[To whom]_j do you wonder [C1P what_i it seemed t_j [C2P t_i [TP Mary bought t_i]]]]?
 c.*?When_i do you wonder [C1P [to whom]_j it seemed t_j [C2P t_i [TP Mary bought it t_i]]]]?
 d.??[To whom]_j do you wonder [C1P when_i it seemed t_j [C2P t_i [TP Mary bought it t_i]]]]?

Oka (1993) が挙げる (iia) の文法性判断は問題を引き起こす。本稿の仮説群によれば、(iia) は (iic) よりも認容度が高いと予測される。

- (ii) (Oka 1993 : (45a) ; (46a) ; (45b) ; (46b))

- a.??What_j do you wonder [C_{1P} who_i I proved t_i [T_{2P} to [v_P t_i have said [C_{3P} t_j that [T_{3P} Mary bought t_j]]]]]?
 b.*Who_i do you wonder [C_{1P} what_j I proved t_i [T_{2P} to [v_P t_i have said [C_{3P} t_j that [T_{3P} Mary bought t_j]]]]]?
 c.*When_j do you wonder [C_{1P} who_i I proved t_i [T_{2P} to [v_P t_i have said [C_{3P} t_j that [T_{3P} Mary bought it t_j]]]]]?
 d.*Who_i do you wonder [C_{1P} what_j I proved t_i [T_{2P} to [v_P t_i have said [C_{3P} t_j that [T_{3P} Mary bought it t_j]]]]]?

- 16) (45c) に対応するイタリア語の用例 (ia) は非文と判断される。(ii) の用例からも判明するように、イタリア語における Wh 島内部からの Wh 要素の移動は対応するスペイン語のそれとは異なる。イタリア語においては、D-Linked Wh 要素として機能する項 Wh 要素が Wh 島内部から移動する。これは、関係詞 Wh 要素を含め D-linked Wh 要素として機能する項 Wh 要素 (DO Wh, IO Wh と Prepositional Object) の始発点として、TP と vP の間に生成されこの種の項である D-Linked Wh 要素が移動する範疇 X の Spec 位置が指定されると考えてみよう。この前提の下で、(ia) と (ib) の相違は、イタリア語の不定法 CP 内における始発点に関する「CP 代替」が C のより下位の先端部 (つまり、Spec(C)) 位置に生起する項 Wh 要素に限定されると想定することにより説明されることになる (Wh 要素の代替となる CP は、当該 Wh 要素がもつ D-Linking 性の代替も引き受けると想定する)。(ia) の非文性は、TP 内における始発点の Spec (X) 指定が義務的に適用されることを示すものである。これは、仮にこの Spec (X) 指定が随意的に適用されると考えた場合に、(ia) に対して合法的な派生が想定可能となるためである。

- (i) a.*La sola questione che_i non so ancora [C_{1P} [a chi]_j chiedere t_j [C_{2P} quando [TP affrontare t_i t_k è la più delicata]]]. (Bordelois 1986 : (67) ; Rizzi (1982 : p.66, (46b))
 ‘the only question that I do not yet know whom to ask when to face is the most delicate.’
 b.?La sola questione che_i non so ancora [C_{1P} [a chi]_j chiedere t_j [C_{2P} di [TP affrontare t_i]]] è la più delicata. (Rizzi (1982 : p.66, (46a))
 ‘the only question that I do not yet know whom to ask to face is the most delicate.’
 (ii) a.??[A chi]_i non ti ricordi [quanti soldi hai dato t_i]? (Rizzi 1982: p.70, fn.5)
 ‘To whom don't you remember how much money you gave?’
 b.[A quale dei tuoi figli]_i non ti ricordi [sq quanti soldi hai dato t_i]? (Rizzi 1982 : p.70, fn.5)
 ‘To which one of your sons don't you remember how much money you gave?’

以下の (iiia-c) の用例は、V (*ritenere* 'believe', *affermare* 'assert', *supponere* 'suppose' etc.) による ECM 構文の embd. 不定法 TP 内に生成された Wh 要素が D-Linked Wh 要素として機能しないことを物語るものである。これらの動詞がコントロール構文をとる (iiid) では、この種の規制が観察されない (イタリア語における Wh 島の事象に関しては、稿を改めて検討する)。

- (iii) (Rizzi 1982 : p.67, (48a) ; p.110, fn.3, (i) ; p.110, fn.4, (iii) ; p.67, (48b))
 a.*Un simile riscatto, che_i mi domando [quante persone]_j ritieni [TP poter pagare t_j t_i], è altissimo.
 ‘Such a ransom, which I wonder how many people you believe to be able to pay, is extremely high.’

- b.*La persona chei non immagino chij ti ritenga [TP aver commesso ti questo errore] è Gianni.
- ‘The person that I don’t imagine who believes to have made this mistake is Gianni.’
- c.?L’uomo chei non immagino [che cosa]_j ti ritenga [TP esser successo ti] è Mario.
- ‘The man that I don’t imagine what believes to have happened is Mario.’
- d.?Un simile riscatto, chei mi domando [quante persone]_j ti ritengano [CP di poter pagare ti], è altissimo.
- ‘Such a ransom, which I wonder how many people believe themselves to be able to pay, is extremely high.’

参考文献

- Adger, David (2003) *Core Syntax: A Minimalist Approach*, Oxford University Press, New York.
- Akahane, Hitoshi (2006) “Inner Islands: A Minimalist Account,” *English Linguistics* 23-2, 315-346.
- Aoun, Joseph (1986) *Generalized Binding: The Syntax and Logical Form of Wh-Interrogatives*, Foris, Dordrecht.
- Aoun, Joseph and Yen-hui Audrey Li (1989) “Scope and Constituency,” *Linguistic Inquiry* 20-2, 141-172.
- Arnaiz, Alfredo (1992) “On Word Order in Wh-Questions in Spanish,” *The MIT Working Papers in Linguistics* 16, 1-10.
- Arnaiz, Alfredo (1996) *N-Words and Wh-in-situ: Nature and Interactions*, Ph. D. dissertation, University of Southern California.
- Barss, Andrew (2000) “Minimalism and Asymmetric Wh-Interpretation,” *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 31-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bordelais, Ivonne (1986) “Parasitic Gaps: Extensions of Restructuring,” *Generative Studies in Spanish Syntax*, ed. by Ivonne Contreras, Heles Contreras, and Karen Zagona, 1-24, Foris, Dordrecht.
- Bošković, Željko (1997) “Coordination, Object Shift, and V-Movement,” *Linguistic Inquiry* 28, 357-365.
- Bouchard, Denis (1984) *On the Content of Empty Categories*, Foris, Dordrecht.
- Boyd, J. Raymond (1992) *Exceptions to Island Constraints and Syntactic Theory*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts.
- Browning, Marguerite A. (1996) “CP Recursion and that-trace Effects,” *Linguistic Inquiry* 27, 237-255.
- Chomsky, Noam (1980) “On Binding,” *Linguistic Inquiry* 11, 1-46.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivations by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Contreras, Heles (1989) “Closed Domains,” *Probus* 1-2, 163-180.
- Contreras, Heles (1991) “On the Positions of Subjects,” *Perspectives on Phrase Structure: Heads and Licensing* (Syntax and Semantics 25), ed. by Susan D. Rothstein, 63-79, Academic Press, San Diego.
- Contreras, Heles (1992) “On Resumptive Pronouns,” *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, 143-163, Georgetown University Press, Washington, D.C.

- Contreras, Heles (1994) "Hacia una reformulación de la subyacencia," *Gramática del Español*, ed. by Violeta Demonte, 237-253, El Colegio de México, México.
- Contreras, Heles (1999) "Relaciones entre las construcciones interrogativas, exclamativas y relativas," *Gramática Descriptiva de la Lengua Española* vol. 2, ed. by Ignacio Bosque and Violeta Demonte, 1931-1963, Real Academia Española, Madrid.
- Demonte, Violeta (1987) "Rección y minimidad en el sintagma nominal," *Sintaxis de las Lenguas Románicas*, ed. by Violeta Demonte and Marina Fernández Lagunilla, 252-290, El Arquero, Madrid.
- É. Kiss, Katalin (1993) "Wh-Movement and Specificity," *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 85-120.
- Epstein, S. (1991) *Traces and Their Antecedents*, Oxford University Press, New York.
- Freidin, Robert (1992) *Foundations of Generative Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Freidin, Robert (1995) "Superiority, Subjacency, and Economy," *Evolution and Revolution in Linguistic Theory*, ed. by Héctor Campos, and Paula Kempchinsky, 138-167, Georgetown University Press, Washington, D. C.
- Freidin, Robert, and Howard Lasnik (1981) "Disjoint Reference and Wh-Trace," *Linguistic Inquiry* 12, 39-53.
- Grewendorf, Günter (2001) "Multiple Wh-Fronting," *Linguistic Inquiry* 32, 87-122.
- Heck, Fabian and Gereon Müller (2000) "Successive Cyclicity, Long-Distance Superiority, and Local Optimization," *Proceedings of WCCFL 19*, 218-231.
- Hornstein, Norbert (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism*, Blackwell, Oxford.
- Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control," *Linguistic Inquiry* 30, 69-96.
- Hornstein, Norbert (2007) "Eliminating PRO: Movement into θ -positions," *Minimalist Syntax: The Essential Readings*, ed. by Željko Bošković and Howard Lasnik, 111-131, Blackwell, Oxford.
- Ishii, Toru (2000) "The Minimal Link Condition and the Theory of Movement," *English Linguistics* 17, 305-329.
- Jaeggli, Oswaldo (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswaldo (1988) "ECP Effects at LF in Spanish," *Advances in Romance Linguistics*, ed. by David Birdsong and Jean-Pierre Montreuil, 113-149, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswaldo (1991) "Head Government in LF-Representations," *Logical Structure and Linguistic Structure: Cross-Linguistic Perspectives*, ed. by C.T. James Huang and Robert May, 79-109, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Kayne, Richard (1983) "Connectedness," *Linguistic Inquiry* 14, 223-249.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Lasnik, Howard (1999a) *Minimalist Analysis*, Blackwell, Oxford.
- Lasnik, Howard (1999b) "Chains of Arguments," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 189-215, MIT Press, Cambridge, MA.
- Lasnik, Howard Mamoru Saito (1984) "On the Nature of Proper Government," *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
- Müller, Gereon (2001) "Order Preservation, Parallel Movement, and the Emergence of the Unmarked," *Optimality-Theoretic Syntax*, ed. by Géraldine Legendre, Jane Grimshaw, and Sten Vikner, 279-313, MIT Press, Cambridge, MA.
- Müller, Gereon (2004) "Phrase Impenetrability and Wh-Intervention," *Minimality Effects in Syntax*, ed. by Arthur Stepanov, Gisbert Fanselow, and Ralf Vogel, 289-325, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Nogawa, Ken'ichiro (2001) "A Semantic Account of Island-Extraction," *English Linguistics* 18-1, 32-56.
- Oba, Yukio (2000) "Island Phenomena and Search Spaces of a Probe," *Linguistic Analysis* 30, 67-92.
- Obata, Miki (2006a) "Weakest Islands," *University of Maryland Working Papers in Linguistics* 14, 143-262.

- Obata, Miki (2006b) "Weakest Island Effects: On the Properties of A'-Movement," *Proceedings of the 25th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Donald Baumer, Dacil Montero, and Michael Scanlon, 306-314.
- Oka, Toshifusa (1993) "Shallowiness," *Papers on Case & Agreement II (The MIT Working Papers in Linguistics 19)*, ed. by Colin Phillips, 255-320.
- Oka, Toshifusa (1995) "Fewest Steps and Island Sensitivity," *Papers on Minimalist Syntax (The MIT Working Papers in Linguistics 27)*, ed. by Penssalfini, Rob, and Horoyuki Ura, 189-208.
- Pesetsky, David, (1982) *Paths and Categories*, Doctoral dissertation, MIT.
- Pesetsky, David, (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding," *The Representation of (In) definiteness*, 98-129, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David, (2000) *Phrasal Movement and Its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.
- Richards, Norvin (1998) "The Principle of Minimal Compliance," *Linguistic Inquiry* 29, 599-629.
- Richards, Norvin (1999) "Featural Cyclicity and the Ordering of Multiple Specifiers," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 127-158, MIT Press, Cambridge, MA.
- Richards, Norvin (2002) "Very Local A'-Movement in a Root-First Derivation," *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel David Epstein and T. Daniel Seely, 227-248, Vlackwell, Oxford.
- Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Sabel, Joachim (1995) Restrukturierung und Lokalität (Studia Grammatica 42), Akademie Verlag, Berlin.
- Sabel, Joachim (2002) "A Minimalist Analysis of Syntactic Islands," *The Linguistic Review* 19, 271-315.
- Simpson, Andrew and Zoe Wu (2002) "Understanding Cyclic Spell-OUT," *NELS* 32, 499-518.
- Suñer, Margarita (1991) "Two Properties of Clitics in Clitic-Doubled Constructions," *Logical Structure and Linguistic Structure: Cross-Linguistic Perspective*, ed. by C.-T. James Huang and Robert May, 233-251, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London.
- Suñer, Margarita (1992) "Indirect Questions and the Structure of CP: Some Consequences," *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, 283-312, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Suñer, Margarita (1995) "Negative Elements, Island Effects and Resumptive no," *The Linguistic Review* 12, 233-273.
- Torrego, Esther (1984) "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects," *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Uriagereka, Juan (1988) On Government, Ph. D. dissertation, The University of Connecticut.
- Uriagereka, Juan (1999) "Multiple Spell-Out," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 251-282, MIT Press, Cambridge, MA.
- Zubizarreta, María Luisa (2001) "The Constraint on Preverbal Subjects in Romance Interrogatives," *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*, ed. by Aafke Hulk and Jean-Yves Pollock, 183-204, Oxford University Press, Oxford/New York.
- 石岡精三 (2007) 「Scope Position の凍結事象—長距離 Wh 要素移動の場合」, 日本ロマンス語学会『ロマンス語研究』40.